Mini Interview 2

民衆に語られてきた親鸞。

同朋大学仏教文化研究所客員所員　塩谷菊美

真宗史料から見える〝普通の人〟たち

――塩谷さんは、『御伝鈔』などの親鸞の伝記をはじめ、織田信長と本願寺が10年にわたって戦った石山合戦や一向一揆に関する軍記などについて研究されてきました。親鸞や浄土真宗の史料に関心を持たれた動機はどのようなものだったのでしょうか？

私の関心は、親鸞という人自身ではなく、親鸞を語ってきた人たちや、語られた方法にあります。

私は定時制高校の国語科教員として、働きながら学ぶ生徒たちに読み書きを教えてきました。そうした経験もあり、歴史や文学の研究のなかでも、一部の特別なエリートより、〝普通の人〟の暮らしについて関心を持つようになりました。ただ、多くの史料は文字ですから、字の読み書きができない人のことについてはなかなか残りません。

例えば、支配者層が記した石山合戦や一向一揆に関する史料を開くと、一揆を起こす真宗門徒に対して悪い感情を持って記されたものがほとんどで、竹槍を握った民衆の声は聞こえてきません。昨年出版した『石山合戦を読み直す』(法藏館)という本では、戦国軍記・近世軍記と呼ばれる物語群に注目し、〝普通の人〟の声に耳を傾けることを試みました。

真宗は在家仏教です。僧侶や貴族だけでなく、働きながら救いを求める者たちのための教えであり、読み書きできない人たちについても視野に入れながら、親鸞が語られていきました。そういう意味で真宗史料は、〝普通の人〟を知ることのできる、とても貴重なものだと思います。

――ご著書『語られた親鸞』(法藏館)では、『御伝鈔』について、お話(物語)型の教義書と説明されています。

「教義書」と聞くと、親鸞の主著『教行信証』などを思い浮かべるかもしれません。しかし『教行信証』は、教義が理論的に説かれたお聖教ですが、仏教の専門知識を前提とした漢語の文章で、非常に難解です。

また、親鸞が「文字のこころ」を知らない人たちに向けて書いたという『唯信鈔文意』も、実際に読みこなせたかは疑問が残ります。そうしたことを考慮すれば、一般の門徒は親鸞の著作ではなく、親鸞の生涯を「お話」という形で聞いていくなかで教義を学んできたのだと想像できます。『御伝鈔』であっても、多くの人は文字で読むことはしていないでしょう。それでも内容や解釈をみながら理解し共有して、教義が伝承されてきたというのが、真宗史料の面白さだと思います。

親鸞の物語を通して教義を学ぶ

――物語が重要な役割を果たす一方、江戸の後半から明治にかけては『御伝鈔』の記述が必ずしも事実通りではないとして批判する意見もみられるようになります。

『御伝鈔』を史実として捉えると無理が生じます。現在の歴史学研究のなかでも、親鸞の出自・修学の部分以外はあまりふれられません。本音を言えば「嘘話だよね」ということです。

しかし、『御伝鈔』が書かれた親鸞没後33年頃は、直弟子や子どもたちが大勢生きていた時代です。誰一人、事実通りでない部分に気づかないということはありえないでしょう。また「蓮位夢想」や「入西鑑察」のエピソードは、それまで語られていた親鸞伝に対して、作者の覚如が意図的に追加したもので、それだけ重要な部分とも言えます。

『御伝鈔』を見ていくときには、史実の研究とは別の視点が必要です。これらの話が「嘘話」だとすると、それはなんのために作られたのか。そうした部分に注目することで、作者や時代の精神を見ていくことができるのだと思います。

――蓮如による『御文』も、真宗の教義を平易に述べたものとして民衆に広く受け入れられました。

蓮如が活躍した15世紀は、真宗史のなかでも例をみない物語不在の時代です。『御文』は、阿弥陀仏と親鸞への報恩感謝を伝える明快な内容で、日々の暮らしに奔走する多くの人たちに受け入れられ、門徒数の爆発的な増大へつながりました。

しかし蓮如以降は、『御伝鈔』の注釈書や浄瑠璃など、さまざまな形で親鸞伝が再び語られるようになります。物語は、語るのに時間がかかり、予備知識や想像力も必要です。しかし人々にとっては、『御文』の伝える明快な教義だけでなく、親鸞がどんなふうに生きて教えを説いたのか、そうした親鸞という人の物語を通して、真宗の教義を学ぶということが大切だったのでしょう。

――これから親鸞はどのように語られていくのでしょうか。

明治に入ると、それまであまり重視されてこなかった『歎異抄』が真宗随一の名作として受け止められるようになります。宗門の枠を超え、沈思黙考する孤独な読書人の愛読書になりました。

個々が孤立した状況下では、物語の世界はうまく機能していきません。だからこそ一人でも向き合うことができる『歎異抄』が人の心をつかんだのでしょう。コロナが流行する現在も、お寺に集うのは難しい状況です。これまで物語が担ってきた親鸞像を描き出すという役割を『歎異抄』が引き継ぎ、各時代の価値観のなかで読まれてきた。明治から現在に至るまで、親鸞像はそのようにして作られてきたのではないでしょうか。

今後の研究では、『歎異抄』や『口伝鈔』をはじめとした、親鸞の言葉を集めた体裁の親鸞伝にも注目したいです。また、現在ではお聖教とされないような、奇瑞不思議を語った親鸞の言葉を収めた書物も多く残っています。そうしたものから、親鸞を語ってきた人々の在り方をさらに探っていきたいと思います。

えんや きくみ

1957年、神奈川県生まれ。同朋大学仏教文化研究所客員所員。早稲田大学第一文学部日本文学科卒業、神奈川県立高校教育職(国語科)、和光大学人文学部文学科専攻科修了、早稲田大学にて学位取得。博士(文学)。神奈川県立高校非常勤講師などを経て現職。著書に『語られた親鸞』、『石山合戦を読み直す―軍記で読み解く日本史』(共に法藏館)など。

『語られた親鸞』
著者／塩谷菊美
発行／法藏館
定価／3,300円(税込)